

『いい覚悟で生きる』 ～ 『丁寧な観察力の修練』 ～

2024 年 2 月 25 日午前中 KBF(Kurume Bible Fellowship)に wife と赴いた。

【『それぞれの 賜物を持っているので、人それぞれに 行き方があります。』（コリント人への手紙第一 7 章 7 節）&『賜物には いろいろの種類がありますが、—— 奉仕には いろいろの種類がありますが、—— 働きには いろいろの種類がありますが、—— ある人には —— 知恵のことばが与えられ、ほかの人には —— 知識のことばが与えられ、—— ある人には ——、いやしの賜物が与えられ、—— おのおのに それぞれの賜物を分け与えてくださるのです。—— からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとえ多くあっても、その全部が一つのからだであるように、——、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。』（コリント人への手紙第一 12 章 4 節～14 節）】は、『個性と多様性の人間』の復学の時となった。

2 月 25 日昼頃『いい覚悟で生きる』（2014 年 小学館発行：添付）の 102-107page：『肝臓のすぐれた働きに学ぶ』を読まれた方からメールが届いた。

筆者は、『日本国のあるべき姿』として『日本肝臓論』を提案している。【『日本国も肝臓のような国になれば、世界から尊敬される。人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担と お互いの非連続性の中の連続性、そして、障害時における全体的な『いたわり』の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。】という趣旨である。

医師となり 25 歳から癌研で毎日 顕微鏡で細胞を診て、病理組織診断と病理解剖に専念したものである。『細胞と組織と器官(臓器)と身体』は、病理医の原点でもある。【『マクロからミクロ』&『ミクロからマクロ』&『森を見て木の皮まで見る』＝『丁寧な観察力の修練』】であり、まさに『いい覚悟で生きる』の実践である。そして、今の『言葉の院外処方箋』に繋がった。本当に、『不思議な人生の流れ』を痛感する 2 月 25 日となった。

がん哲学外来から広がる言葉の処方箋

いい覚悟で生きる

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授
一般社団法人がん哲学外来理事長

樋野興夫

小学館